

第2章 熊

伊波知恵

2.1 熊の概要

熊は食肉目クマ科の構成種で、主に北アメリカ大陸、南アメリカ大陸、ユーラシア大陸、インドネシア、スリランカ、台湾、日本、北極に生息している。

2.1.1 日本の熊

①ツキノワグマ

アジア大陸に起源をもつツキノワグマ（別名アジアクロクマ）は、現在イラン、アフガニスタンの西アジアから、日本、韓国、台湾の東アジアにかけて広く分布している。このうち、日本に生息するツキノワグマは、日本が大陸と地続きであった 30～50 万年前の氷河期に、大陸から渡ってきたと考えられている。その後、日本列島は大陸から切り離され、日本のツキノワグマは亜種（ニホンツキノワグマ）として遺伝的に独自の分化をした。

現在の日本のツキノワグマの遺伝子を調べると、大きく 3 つのグループに分けることができる（琵琶湖以东の東日本グループ、以西の西日本グループ、そして紀伊半島と四国のグループ）。本州と四国の 33 都道府県に生息する。

胸部に三日月形やアルファベットの「V」字状の白い斑紋が入り（無い個体もある）、和名の由来になっている。

平均的な個体で、頭胴長（頭の先からお尻まで）は 110～130cm、体重はオスが 80kg 程度、メスが 50kg 程度である。個体差や季節の変動が大きく、小さい場合は約 40kg、最大で約 130kg 程度に成長する。

雑食性で植物を主食とするが、ウシやヒツジのように食物繊維を消化するための特殊な消化器官を持たないため、硬くて繊維質の多い植物は避ける傾向がある。以下、ツキノワグマが食べる食物である。

図 2-1 ツキノワグマ



出所：日本ツキノワグマ研究所

図 2-2 ツキノワグマの分布



出所：WWF Japan

表 2-1 ツキノワグマの食物

季節	食物	備考
早春	いろいろな食物の新芽や若葉、ブナ類の実、ナラの実	冬眠で絶食状態にあったクマが体力を回復させる。 若葉：タンパク質が豊富で消化しやすい。 ブナ類の実：脂質とタンパク質が多い。 ナラ類の実：炭水化物を多く含み、栄養価が高い。
春～夏	花や実をつける植物、イチゴの仲間、サクラ類、昆虫や動物、その死骸	甘く肉厚な果実を好み、アリやハチなどの社会性昆虫やサワガニを利用し、植物を見つける。昆虫や動物は主に夏にかけて食べられ、蜂や小鹿が獲物となる。
秋	ブナ類の実、ナラ類の実、ミズキ、タカノツメ、アオハダ、サルナシ、ヤマブドウ	冬眠のために十分なエネルギー（脂肪）を貯めておかなければならない。早春に食べる植物のほか、秋に成る果実も食べる。

WWF Japan より筆者作成

このように春から秋にかけて、さまざまな食物を利用している。

②ヒグマ

北半球に広く生息するクマの一種で、大型の哺乳類としては、きわめて広い分布域を持つ動物として知られている。ツキノワグマ同様アジア大陸に起源を持ち、その後 2 つの系統に分かれたと考えられている。1 つの系統はアジアで分化したグループで、さらにその一部は、氷河期に陸続きだったベーリング海峡を渡り、北アメリカにも移動したと考えられている。もう 1 つの系統はヨーロッパに定着したグループで、かつては数多く生息していたようであるが、近代以降、開発によって生息地を追われ、西ヨーロッパではほとんど絶滅してしまった。

環境省の資料によると、成獣で頭胴長（頭の先からお尻まで）は 200～230cm、体重は 150～250kg とされている。ツキノワグマと同様に、オスの方がメスよりも大きくなる。記録によると、2002 年に斜里町で捕獲されたオスは、体重 400kg もあったといい、日本では最大の陸上動物である。

図 2-3 ヒグマ

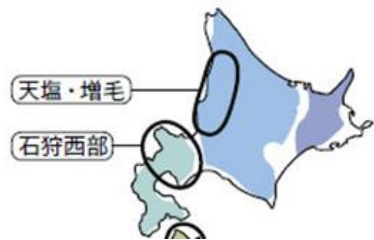


片原顕光撮影

ヒグマは雑食性で、植物を主食としており、食性は地域によって異なるが、季節の変化によっても食べるものを変えている。

このように、クマの食性はそれぞれの季節、それぞれの場所で利用できる食物に柔軟に対応している。

図 2-4 ヒグマの分布



出所：WWF Japan

表 2-2 ヒグマの食物

季節	食物	備考
春～初夏	フキ（アキタブキ・オオブキ）、ウド、イラクサ、ミズバショウ、アリ・ハチなどの昆虫	植物を、割合を減らしながらも、秋まで食べ続ける。柔らかく消化しやすい植物が減る夏になると、植物性の食物不足を補うために、アリやハチなどの昆虫を利用する。
夏～秋	サルナシ・ヤマブドウ・マタタビなどのツル性の植物の果実、ミズナラのドングリ、シウリザクラ・ナナカマドの果実	本州のツキノワグマに比べると、ブナ科の実（ブナやミズナラの実）への依存度はあまり高くない。
晩秋	トウモロコシ、テンサイ、エゾシカの補色・死骸	北海道の広い範囲で、クマが農作物を食害する。

WWF Japan より筆者作成

2.1.2 外国の熊

今回は割愛させていただくが、外国の熊の一覧は以下のとおりである。

表 2-3 外国の熊

ジャイアントパンダ	メガネグマ
	
マレーグマ	ナマケグマ
	
アメリカグマ	ホッキョクグマ
	

Wikipedia より筆者作成

2.2 人間と熊

2.2.1 イオマンテ

アイヌと熊の繋がり深く、アイヌの儀礼のひとつで、ヒグマなどの動物を殺してその魂であるカムイを神々の世界に送り帰す祭りであるイオマンテが行われていた。冬の終わり

に、まだ穴で冬眠しているヒグマを狩る猟を行い、冬ごもりの間に生まれた小熊がいた場合、母熊は殺すが、小熊は集落に連れ帰って育てる。大きくなってくると屋外の丸太で組んだ檻に移すが、やはり上等の食事を与える。1〜3年ほど育てた後に、集落をあげての盛大な送り儀礼を行い、丸太の間に首を挟んでヒグマを屠殺し、解体してその肉を人々にふるまう。宗教的には、ヒグマの姿を借りて人間の世界にやってきたカムイを一定期間大切にもてなした後、見送りの宴を行って神々の世界にお帰り頂くものと解釈している。ヒグマを屠殺して得られた肉や毛皮は、もてなしの礼としてカムイが置いて行った置き土産であり、皆でありがたく頂くというわけである。

2.2.2 木彫り

北海道のお土産といえば、熊の木彫りを思い起こす人が多いだろう。私の実家にも一つあった。木彫りの熊は農村の暮らしを支える民芸品として誕生した経緯があり、八雲町が発祥の地である。

八雲町は、明治維新で侍の職を失った旧尾張藩士やたちが、新天地を求めて移住し、開墾した土地である。尾張徳川家第19代当主で、マレー半島での虎狩りの経験から「虎狩りの殿様」と呼ばれた徳川義親は、1923年、スイスの旅行帰りに動物彫刻を八雲町に持ち帰り、冬の農閑期に収入を得られる副業を考え、この見本から熊の木彫りを作り、産業に発展していったとされている。また、狩猟採集漁撈の生活ができなくなったアイヌの新たな仕事となったとも言われている。

図 2-5 熊の木彫り



出所：JapaneseClass.jp

2.2.3 獣害について

クマの大きな体は、多くのエネルギーを必要とすると共に、高い移動能力も兼ね備えており、なわばりを持たず、自由に移動することによって、必要な食物を得ている。例年、山中の食物が不足する夏、一部のクマは人里に出没し、農作物（果樹や飼料用トウモロコシなど）を食害している。秋になり木の実が成るようになると、食害は収まる一方、秋になっても人里への出没することもあり、社会的な問題となっている。食害だけでなく、人身被害も多い。

2.2.3.1 三毛別熊事件

1915年12月9〜14日にかけて、北海道苫前郡苫前村三毛別（現苫前町三溪）六線沢で

発生した、熊の獣害としては日本史上最悪の被害を出した事件である。この事件により、エゾヒグマが数度にわたり民家を襲い、開拓民7名が死亡、3名が重傷を負った。事件を受けて討伐隊が組織され、問題の熊が射殺されたことで事態は終息した。

この事件を記録した木村盛武は、ヒグマの行動から得られた教訓について言及した。表2-3はそのまとめである。

馬への被害は皆無だった一方で女性や幼い男の子の肉の味を覚えてしまい、人間を襲うこととなった。一般に熊は人を恐れ、人を襲うのは突然人間と出会いその恐怖心からと言われている。それを防ぐためには鈴などを鳴らして人間の存在を事前に知らせ鉢合わせする機会を減らせばよいとされる。しかし人間の無力さと人肉の味を知った熊の個体は人間を獲物と認識するようになる。その場合、鈴の音などを鳴らすと獲物の存在を知らせる事になり、かえって危険である。

皆さんがもし熊と遭遇することがあれば、これらの教訓を生かし、命を守ってほしいと思う。

表 2-4 熊との教訓

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">①火を恐れない②執着心が強い③逃げるものを追う④死んだふりは無意味⑤一度人間の味を覚えた個体は危険 |
|---|

Wikipedia より筆者作成

2.3 熊牧場

2.3.1 上川の熊牧場

上川の熊牧場は、熊だけを集めた動物園ということもあり、シンプルなつくりとなっている。入退場ゲート付近には北海道民と熊の歴史を堪能できる小さな資料館もある。

営業時間は 9 : 00 ~ 16 : 00 (時期によって変更あり) で、利用料金は大人 600 円、中学生 400 円、小学生 200 円 (餌代 100 円含む) である。

図 2-6 熊に囚われた秋野とゼミ生



久松優菜撮影

図 2-7 資料館



片原顕光撮影

2.3.2.1 ブース内でみられる表情や仕草

愛嬌たっぷりのヒグマたちが餌をもらうために「頂戴」ポーズや足を掴むなどして注目を集めているようすがみられる。遠方から投げ込まれた餌を上手にキャッチする熊たちの器用さと可愛さを堪能できた。

図 2-8 「頂戴」をするヒグマ



片原顕光撮影

図 2-9 ストレッチをするヒグマ



片原顕光撮影

2.3.2.2 「精神的に病んでいる」

前述したようにブース内では熊たちが餌を求め、様々な表情と仕草で、私たちの注目を集めようとしていた。しかし、2頭だけ多数のヒグマとは違う檻に入れられており、檻の中で行ったり来たりと往復を繰り返し、異様な雰囲気立ち込めていた。その熊に対して角先生が放った一言、「精神的に病んでいる」が私の脳裏に刻まれ、気になっていたのを調べてみた。

熊の往復行動パターンは「常同行動」と呼ばれ、飼育下に置かれた動物が起こす異常行動であるという。狭すぎる檻や、退屈な毎日、一日中見られる環境などは野生の動物とは相反した多大なストレスであることから、動物園や観光型牧場の是非が問われており、「精神的に病んでいる」は的中していたことが分かった。これを機に皆さんが動物園や観光型牧場を考えるきっかけになれば幸いである。

図 2-10 檻の中にいるヒグマ



筆者撮影

参照 HP

- ・ ALIVE 地球生物会議

<http://www.alive-net.net/index.html>

- ・ Wikipedia 「イオマンテ」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%82%AA%E3%83%9E%E3%83%B3%E3%83%86>

「クマ」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%9E>

「ツキノワグマ」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%84%E3%82%AD%E3%83%8E%E3%83%AF%E3%82%B0%E3%83%9E>

「三毛別熊事件」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%89%E6%AF%9B%E5%88%A5%E7%BE%86%E4%BA%8B%E4%BB%B6>

- ・ WWF Japan

<https://www.wwf.or.jp/activities/2012/01/1038917.html>

- ・ 北海道アイスパビリオン 施設について 熊牧場

<http://www.icepavilion.com/syuuhen.html>

- ・ 北海道ファンマガジン

<https://pucchi.net/hokkaido/closeup/kiborikuma.php>